次の文を読んで、後の問いに答えよ。なお、字数制限がある場合は、句読点等も字数に数えるものとする。（60点）

近代の日本人が国際情勢に①ビンカンで、絶えず外国の事情に関心をもち、外国と自国の比較に熱心であったことには、それなりの歴史的な理由がある。

外部の世界に対するこの強い関心は、外部との接触の機会が多かったから生じたのではなく、接触の機会が少なかったから生じた。まずはじめに鎖国があった。鎖国がこの島国のなかに[A]一種の純粋培養として独特の地方文化を育てるために役立ったことはいうまでもない。その純粋培養文化と「黒船」とがはじめて出会ったときに、日本国民は、日本の外部で何がおこっているかということについて、ほとんど何も知らなかったが、到底敵し難い軍事力があるらしいということだけは理解したのだ。

[B]かくして生じた外部に対する関心は、単なる好奇心以上のものである。十九世紀の終りまでに世界中を②セイフクし、分割し、植民地化しようとしていた大国、殊に英・仏・露・米に対して、独立をまもる必要があり、独立をまもるためには、鎖国下に養われた体制と技術と文化を、もっと能率的なものに改造して、急速に軍事力をつくりあげる必要があった。ところが改造を急速に行うためには、相手方から学びとるほかはない。「近代化」とは、相手から学びとることによって、能率的な社会と軍事力をつくりあげる過程以外のものではない。

近代日本と外部の世界との関係は、外部に対抗するために外部から学ぶというこの「対して」と「から」の逆説的で二重の関心の構造からはじまったといえるだろう。多くの西欧諸国では、互いに国境を接して、戦乱の歴史がくりかえされたために、その国民の外部に関する関心は、主として「対して」の面に集中されている。フランス国民のドイツ国についての伝統的な関心は、相手「から」何かを学ぶためではなく、相手に「対して」自国の安全をはかるためである。一方植民地化されたアジアの多くの国には、外部「から」異質の文化がもちこまれた。外部に「対して」自己を主張する関心が大きな傾向となりはじめたのは、第二次大戦後の反植民地帝国主義の擡頭以後のことである。ただ日本の場合にのみ、その外部への関心が、外部に「対して」自己を主張する面と、外部「から」影響をうける面と、二重の構造を備えていたのである。

しかしもちろん外部に「対して」の自己主張と、外部「から」の影響摂取とは矛盾なしに折合っていたわけではない。国の独立のために、外部から要をとり、不要を捨てる、ということは、簡単には行われようがなかった。第一、外部からとるべき「要」が、純粋の技術にかぎらず、精神の領域に及ぶと、—すべての制度は、すでにその背景としての特定の価値の体系にむすびついているから、外国の制度を輸入する以上、外国の精神もまた問題にしないわけにゆかない、—国の独立のための要・不要という尺度だけでは片づかぬ面があらわれる。なぜならすべての文化にはそれなりの自律性と自己完結性があるからだ。[C]すなわち自己主張との矛盾衝突は、避けられないということになる。一方自己主張も、政治的な独立ということだけ要約されて終るものではない。自己主張は、政治的な面だけでなく、また多かれ少かれ、経済的・文化的な面での自己主張をも含む。しかも第二に、自国の独立のために必要な「富国強兵」という考え方は、みずからが植民地化される危険の遠ざかるや否や、他国を植民地化するための膨脹主義に変貌する。それは軍国主義となり、排外主義となり、遂にみずから進んで軍事的冒険に乗り

出す超国家主義となるだろう。ア その極端な段階では、もはや、外国の長をとるという考え方を容れる余地がなくなり、文化的孤立のなかで③ジメツするのだ。

すでに明治のはじめに、日本国内には、外部に「対して」の国権論があり、外部「から」とり入れられた思想を背景としての自由民権論があった。またその後の各時代に「対して」の関心と「から」の関心のそれぞれ時代的な表現がある。最近の、そしてまたもっとも極端な例は、一九四五年八月を境として、それ以前の「鬼畜米英」と「日本は神国」であり、それ以後の「米英民主主義」と「平和国家」である。「対して」と「から」の二重構造は、近代日本のあらゆる時代を貫いていた。ただ時代によって、あるときには日本人の対外的な態度に、「対して」の面が強調され、またあるときには「から」の面が強調されたから、歴史をふりかえってみると、日本の近代史はその二つの態度の交替する④ジュンカン過程のようにみえるのである。

一八六八年維新以後、およそ十五年間は、自由民権運動と鹿鳴館（ろくめいかん）に象徴される「から」の時期である。民間には福沢諭吉（一八三四―一九〇一）があって、外部からの思想を導入するのに急であり、政府側には岩倉使節団の⑤ハケンということがあり、その目的は敵情を探るというようなことではなく、外国から学ぶべきものを学びつくそうということであった。しかしこの時期は、比較的短く、およそ十年か十五年の間に次の「対して」の時期に移行する。その移行の過程で、時間を限るのに何をめじるしとするかは必ずしも一義的に決定し難いが、今は教育方針の確定を標準として、一八八五年（明治十八）をとることにしよう。

一八八五年森有礼（もりありのり）（一八四七―八九）は初代の文相となり、以後一九四五年まで根本において変らぬ国家主義的な教育制度をつくった。そのときから第一次大戦まで、対清国（一八九四―九五）および対帝政ロシア（一九〇四―〇五）のいくさを通じて、およそ三十年の間に、思想的には天皇制、政治的には軍国主義・官僚主義的な体制、経済的には貧農と低賃金労働者を足場とする巨大資本の蓄積が行われたといってよいだろう。外国からの影響を工業技術の最小限にとどめて、日本独自の国体、醇風美俗（じゅんぷう）・日本精神を強調する傾向が、社会のあらゆる水準において著しい。また イ この時期を通じて、外国によって植民地化される危険から身をまもることを目的として出発した「近代化」は、それが急速に行われざるをえなかったという理由そのものにより、早くも膨脹主義に変質するのである。急速な資本蓄積のためには、低賃金労働の維持を必要とし、低賃金労働は国内市場をせまくする。ということは、国外に市場をもとめることが「国策」とならざるをえないということだ。また外国からの借り入れに頼らずしかも急速に行われた資本蓄積の少くとも一部は、日清戦争の賠償金に負うている。

十九世紀末から二十世紀はじめへかけてのアジアで、―ということは植民地分割の最後の段階でのアジアでということになる―国外市場と賠償金とは、軍事的手段で獲得することのできる二重の誘惑であった。しかもその誘惑は二つのいくさに成功することで、現実となった。D 日本の軍国主義化は避け難い。しかし外部との接触を、軍事・工業技術の輸入にかぎることには限度があり、接触のある以上、多かれ少かれあらゆる影響が外部から入ってくるのを防ぎきることはできない。

（加藤周一「日本人の世界像」による）

〔注〕醇風美俗　人情が厚く、うるわしい風俗、習慣。良風美俗ともいう。

問1　傍線部A「一種の純粋培養として独特の地方文化を育てる」とあるが、この「独自の地方文化」と同じ内容を示している箇所を、本文中から二十字以内で書き抜いて示せ。

問2　傍線部B「かくして生じた外部に対する関心は、単なる好奇心以上のものである」について、「関心」が「好奇心以上のもの」になっているのは、どうしてか。六十字以内で答えよ。

問3　傍線部C「すなわち自己主張との矛盾衝突は、避けられない」について、次の二問にそれぞれ答えよ。

ア　「自己主張」と「矛盾衝突」するのは何か。

イ　なぜ「避けられない」のか。

問4　文中の二つの指示語（ア、イ）が指示する内容を、それぞれ本文中から書き抜いて示せ。

ア　その

イ　この

問5　傍線部D「日本の軍国主義化は避け難い」とあるが、それはどうしてか。その理由を本文に即して百字以内で説明せよ。

問6　傍線部①～⑤のカタカナを漢字になおせ。

二

次の文を読んで、後の問いに答えよ。なお、字数制限がある場合は、句読点等も字数に数えるものとする。（60点）

それにしても、詩人がことばという身体になってしまうことは、それがどんなに自由の魅惑に満ちていても、不幸なことかも知れない。なぜなら、健康とか、幸福とか、①イアンというのは、むしろ、Aことばを不要にしている場所に訪れるものだからだ。ちょうど空気を意識するとき、空気が汚れているように、こどもを強く思うとき、こどもが病んでいるように、平和を過剰に意識せねばならぬとき、平和が死んでいるように、ことばを意識し、ことばに憑き、ことばの身体になってしまうということは、ことばが危機にさらされている、あるいはことばに表象される人間が危機にさらされている、と言えなくはない。

いつの時代でも、ことばは使いふるされて、病んだり、死んだりしてゆくが、特に、現代はそのスピードがとても速い。昨日まできらきらしていたことばが、きょうは、もう使いものにならない、ということがよくある。そのとき、詩人はことばの病気を見つけ、それをよみがえらそうとする医者のようなものだろう。しかし、ことばの病気があまりに重く、死に瀕(ひん)しているとき、それを生き返らそうとする努力は、詩人をほとんどB<u>ことばの病気</u>にしてしまう。詩人がことばの身体になってしまうということは、そのような病症を示している、とも言える。しかも、ことばの病気には魅力的なところがあるから、いったん、重症になってしまうと、もはや直りたくないのだ。あの「お医者さま」という詩のなかでうたわれているお医者さまのように。

お医者さまは病気をみつけるのが趣味です
というのも近ごろでは何故か
病気になりたがっている人が多いからです
どこも悪くなくてぴんぴんしているのは
鈍感みたいで恥ずかしいという銀行員に
桃色と黄色と透明な薬をあげます
ひとつも病気がないというのも病気の一種だと
お医者さまは分かりやすく説明してくれます
お医者さま自身ももちろん病気です
なおらないように毎日湿布をしています（「お医者さま」）

―谷川俊太郎は、《なおらないように毎日湿布をしている》詩人かもしれない。むろん、そこにはユーモアがあるので病気のようにはまったく見えないが、しかし、彼が毒をもって毒を制する危険に身をさらしていることはたしかだ。その現代詩のもっとも尖端(せんたん)的な試みのなかに詩集『定義』は成立している。

わたしたちは、［ア］や概念を区別し、その差異を明らかにするために、それを［イ］で限定しようとする。それが定義だ。日常の世界では、こうした沢山の、しかもあやふやな定義の暗黙の了解を前提にして、言語生活が成り立っている。しかし、［ウ］の変容でその定義が意味を失っていたり、あるいはあまりにそれを当然の前提とするために、かえって［エ］のほんとうの姿から遠ざかっていた

り、もともと定義不能の領域がいっぱいあるのに、陳腐な定義によって安心していたりする。つまり、［オ］が病んだり、死んでいる状態とは、ことばとものの関係の死、それを支えている人間の関係の死のことであろう。

詩集『定義』には、さまざまな試みがあるので、それをただ一つの理解にひきつけることは危険だが、その主要な試みのなかには、このC ものとことばとの既成の関係を解体し、最初にものをことばで名づける、あの不安で魅惑に満ちた関係を取りもどそうとする方法があるように思う。もとよりそれは正しい定義とか、理想的な定義というような、ものをことばの新しい②キハンをめざすことではない。ものとことばで名づける、あるいはついに名づけることができないという、自由で不安に満ちたそのものをめぐることばの運動の過程の記述、それ自体がめざされた、と言ってよい。たとえば、「コップへの不可能な接近」は、次のような作品だ。

それは底面はもつけれど頂面をもたない一個の円筒状をしていることが多い。それは直立している凹(くぼ)みである。重力の中心へと閉じている限定された空間である。それは或(あ)る一定量の液体を③カクサンさせることなく地球の引力圏内に保持し得る。その内部に空気のみが充満している時、我々はそれを空と呼ぶのだが、その場合でもその輪郭は光によって明瞭(めいりょう)に示され、その質量の実存は計器によるまでもなく、冷静な一瞥(いちべつ)によって確認し得る。

指ではじく時それは④シンドウしひとつの音源を成す。時に合図として用いられ、稀(まれ)に音楽の一単位としても用いられるけれど、その響きは用を超えた一種かたくなな自己充足感を有していて、耳を脅かす。それは食卓の上に置かれる。また、人の手につかまれる。しばしば人の手からすべり落ちる。事実それはたやすく⑤コイに破壊することができ、破片と化することによって、凶器となる可能性をかくしている。（「コップへの不可能な接近」前半）

―コップは、それがつくられた使用目的から言えば、《主として渇きをいやすために使用される一個の道具》であるに過ぎない。しかし、そうした〈用〉からはなれて、あるがままのコップについて記述しようとすると、形状、空間、質量、音響、そして、D思いもよらない可能性への逸脱……といった多面的な意味をあらわしてくる。ことばによるものへの接近は、ものそのものをあらわしているようだけれども、むしろ、そのものについての詩人のことばの経験の深化や広がりを語っている。そして精密な記述になればなるほど、ものとは異質なことばの自立した空間をつくりだしてしまう。この「コップへの不可能や接近」は、そのことをよく語っているように思う。

ことばによる定義には、どんな定義にも必ず、E ものへの接近がものからの逸脱となる矛盾がひそんでいるのに、すべての定義はものの正確な理解という片面しかあらわしていない。谷川俊太郎は、その矛盾に満ちたものへの〈不可能な接近〉を、ことばの自由な運動と化すことで、

そこに詩の現前を見ようとしたのだと思う。

（北川透「怪人百面相の誠実」による）

問1 傍線部A「ことばを不要にしている場所」を「幸福」を例にとって、分かりやすく説明せよ。

問2 傍線部B「ことばの病気」とは詩人にとってどういう状態をいうのか。五十字以内でわかりやすく説明せよ。

問3 空欄ア～オに「もの」または「ことば」を補充せよ。

問4 傍線部C「ものとことばとの既成の関係を解体」するとはどういうことか。簡潔に説明せよ。

問5 傍線部D「思いもよらない可能性」とは何か。本文に即して具体的に答えよ。

問6 傍線部E「ものへの接近がものからの逸脱となる矛盾」を説明せよ。

問7 傍線部①～⑤のカタカナを漢字になおせ。

三

次の文を読んで、後の問いに答えよ。（40点）

昔、某の僧都とて、尊き人、ある宮腹の女房に、a心ざしを移す事ありけり。思ひかねてや侍りけん、うち口説き、心の底を表はしければ、この女、とばかりためらひて、「なじかは、さまで煩ひ給ふべき。里にまかり出でたらんに、必ず案内し侍らん」といひけり。この人、ただb おほかたの情かとは思へども、さすがまた、①昔には似ずなん思ひ居りける。

かかるに、いくほどもあらで、「このほどまかり出でたる事侍り。今夜はこれに侍るべし」といひたり。さるべきやうに、出で立ちて行きぬ。この人出で会ひて、「仰せの揺ぎなく重ければ、まかり出でて侍り。ただし、この身のありさま、臭く穢らはしき事、譬へていはんかたなし。頭の中には脳髄間なく湛へたり。膚の中に肉・骨を纏へり。すべて、血流れ、膿汁垂りて、一も近付くべき事なし。しかあるを、さまざまの外の匂ひを傭ひて、いささかその身を飾りて侍れば、何となく心にくきさまに侍るこそありけれ。②そのまことのありさまを見給はば、定め

てけうとく、恐しくこそおぼしなり給はめ。このよしをも、細かに口説き申さむとて、里へとは申し侍りしなり」とて、「人やある。火ともして参れ」といひければ、切灯台に火いと明くともして来たり。

さて、引き物をあげつつ、「かくなん侍るを、いかでか御覧じ忍び給ふべき」とて出でたりけり。髪はそそけ上がりて、鬼などのやうに、c あてやかなりし顔も、青く、黄に変はりて、足などもその色なく、d いぶせく汚くて、血ところどころ付きたる衣のあり香、まことに臭く、耐へがたきさまにて、さし出でてさめざめと泣きて、「日ごとに繕ひ侍るわざを止めて、ただ我が身の成り行くにまかせて侍れば、姿も着る物もかくなん侍るにはあらずや。そこは、仏道近き御身なれば、偽りの色を見せ奉らんも、かたがた畏れも侍りぬべければ、かやうにうちとけ侍りぬるなり」と、かき口説きいひけり。

この人、つゆ物いふ事なし。さめざめと泣きて、「いみじき友に逢ひ奉りて、心をなん改め侍りぬる」とて、車に急ぎ乗りて、帰りにけりとなん。③まことにいみじく賢く侍りける女の心なりけり。

（『閑居友』下「宮腹の女房の、不浄の姿を見する事」による）

問1 傍線部a～dを現代語に訳せ。

問2 傍線部①「昔には似ずなん思ひ居りける。」とは、どのような気持ちであったのか。「昔」の語に注意して、具体的に述べよ。

問3 傍線部②「心にくき」を現代語に訳し、その対義語を本文中から書き抜け。

問4 説話の語り手が、傍線部③のように「まことにいみじく賢く侍りける女の心なり」というのはなぜか。その理由を述べよ。

問5 出典の『閑居友』と同じく、鎌倉時代に成立した説話集をひとつあげよ。

四

次の文を読んで、後の問いに答えよ。（40点）

往昔之世、有富愚人。痴無所知。到他富家、見三重楼、高広厳麗、寛敞開朗、心生渇仰、即作①是念。我有財銭、不減於彼、ⓐ何為従来不造作如此之楼。

即喚木匠而問曰、「②能作如彼端正屋舎乎。」木匠答言、「是我所作。」即言曰、「③今可為我造楼如彼。」ⓑ於是木匠即経地墨磚作楼。愚人見其墨磚作舎、ⓒ猶懐疑惑、ⓓ不能了知。而問之曰、「欲作何也。」木匠答言、「④作三重屋。愚人復言、「我不欲下二重之屋。先可為我作最上屋。」木匠答言、「無有是事。ⓔ⑤何有不作最下重屋而得作彼第二之屋。不造第二、如何得造第三重屋。」

（六朝斉・求那毘地訳『百喩経』による）

（備考）この文には、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。

〔注〕寛敞開朗＝ひろびろとしていること。　渇仰＝ひどく欲しがること。　墨磚＝レンガを積み重ねること。

木匠＝大工の棟梁

問1 波線ⓐ「何為」、ⓑ「於是」、ⓒ「猶」、ⓓ「不能」、ⓔ「如何」の読み方を、送り仮名も含めてひらがなで記せ（現代仮名づかいでもよい）。

問2 傍線部①「是念」とはどのような思いか。三十字以内で述べよ。

問3 傍線部②「能作如彼端正屋舎乎。」を、わかりやすく訳せ。

問4 傍線部③「今可為我造楼如彼。」を、書き下し文に改めよ。

問5 傍線部④「無有是事。」とは具体的にどういうことか、三十字以内で説明せよ。

問6 傍線部⑤「何有不作最下重屋而得作彼第二之屋。」を、書き下し文に改めよ。

問7　この文は仏教の修行のあり方について述べた寓話である。ここから導き出される教訓について、五十字以内で説明せよ。

問8　『百喩経』は仏教の経典の一つであるが、仏教に由来する次の言葉の読み方を記せ。

(1) 成就　(2) 往生　(3) 帰依　(4) 解脱　(5) 会釈